

名詞を基体にとる-er 名詞の意味について
—クオリア構造による分析を通して—

増淵 佑亮

1. はじめに

接尾辞・er は、teacher や dancer、runner などに見られるように、動詞を基体にとることが多い。一方で、少数ではあるが、名詞を基体取ることもある。次の(1)に具体例をいくつか挙げる。

- (1) prisoner, kindergartener, outfielder, Londoner, New Yorker, highlander, bagger, fanner, pensioner, whaler

こうした「名詞・er」の意味を解釈してみると、その意味の中に動詞的な意味が含まれているように感じられる。例えば、kindergartener は「園児」や「保育士」を指すが、基体となっている名詞 kindergarten が単独で使われた場合の意味にはない動詞的な要素が加わっている。「園児」や「保育士」を言い換えると、「kindergarten で世話される子ども」と「kindergarten で子どもの世話をする人」である。下線を付けた部分のような動作は、どこから導入されるのだろうか。

本論文では、名詞に接尾辞・er が付いてできた語の意味について、クオリア構造を用いた分析を行う。クオリア構造を用いた「名詞・er」の意味記述を行いながら、基体の名詞と「名詞・er」を比較し、基体の名詞と「名詞・er」はどのように関連しているのかについて論じる。また、3.4 では、「動詞・er」との関連についても触れる。

2. クオリア構造

クオリア構造は、Pustejovsky (1995)で提案されている意味表示である。このクオリア構造は、4つのクオリアで語彙の様々な側面を表すものである。Pustejovsky (1995)は、クオリア構造の各役割を次のように説明している。

- (2) CONSTITUTIVE : the relation between an object and its constituent

parts

FORMAL : that which distinguishes it within a larger domain

TELIC : its purpose and function

AGENTIVE : factors involved in its origin or “bringing it about”

(Pustejovsky 1995: 76)

それぞれのクオリアについて、小野(2008)を参考に説明すると、次の(3)のようになる。

- (3) 構成役割: あるモノや事象を構成するパーツや要素、部品などの内的な性質
形式役割: どのような種類のものなのか、などの外的な性質
目的役割: どのような目的や機能を持っているのか、に関する知識
主体役割: モノや事象がどのように発生したのか、に関する知識
(小野(2008)を参考)

クオリア構造について、具体例を挙げながらもう少し詳しく見ていく。次の例を見てみよう。

(4) letter

構成役割: pages (x)
形式役割: message (y)
目的役割: communicate (e, w, y, z)
主体役割: write (e, w, x)

(小野 2005: 66)

(5) novel

構成役割: narrative
形式役割: book (x)
目的役割: y read x
主体役割: z write x

(Pustejovsky1995: 78)

x や y で示されるものは、項(argument)である。本論文では、項構造は独立して表示せず、クオリア構造内で示していく。まず、(4)の例を見てみよう。(4)の例では、letter は pages から成り (構成役割)、それは message の一種であり (形式役割)、communicate するためのものであり (目的役割)、write することによって生み出される (主体役割) ということがクオリア構造に示されている。次に、(5)の novel の例を見てみよう。構成役割と形式役割では、novel の中身は narrative であり (構成役割)、novel というのは book の一種である (形式役割) ということが示されている。目的役割と主体役割では、novel は read するためのものであり (目的役割)、novel は write することによって生み出される (主体役割) ということが示されている。なお本論文では、(5)の表記方法をとる。

ここまでの例は、すべてのクオリアが指定されている例だった。しかし、クオリア構造の4つのクオリアは、必ずしもすべて指定されていなければならないというわけではない。次の(6)の例を見てみよう。

(6) reel

構成役割: content (x): x is part of y

形式役割: y is container of x

目的役割: R

(小野 2005: 60)

小野(2005)によれば、(6)の reel の目的役割は、構成役割の content がどんなものであるかによって定められる。例えば、a film reel と a fishing reel に共通する機能があるとは考えづらい。このように目的役割や主体役割の情報を持っていないと考えられるものの場合、目的役割や主体役割を無指定にしておく。特に自然物の場合は、目的役割や主体役割が指定されず無指定になっていることが多い。

最後に、クオリア構造では人間をどのように分析するのを見ておこう。

(7) pedestrian

形式役割: human(x)

主体役割: x walk

(8) violinist

形式役割: human(x)

目的役割: x play y(=violin)

(Pustejovsky1995: 230)

ここでは、Pustejovsky (1995)よりもこの点について詳しく述べている Busa(1997)の考え方を参考にする。細かい議論についてはここでは触れないことにするが、Busa(1997)では、一時的な動作を表す場合(stage-level)はその情報を主体役割に記載し、職業などの属性的な動作を表す場合(individual-level)は、その情報は目的役割に記載されると考えている。まず、(7)の pedestrian の例を考えてみよう。pedestrian は歩くのを止めてしまったら、pedestrian ではなくなってしまう。つまり、walk という動作を行っているときに限定されて、一時的に pedestrian となっているのである。したがって、walk は主体役割に記載されることになる。次に、(8)の violinist の例を考えてみよう。violinist は、ヴァイオリンを弾いていなくても violinist である。これは一時的な状態ではなく、ある人に付与される属性の一種と考えてよいだろう。したがって、play は目的役割に記載されることになる。

3. クオリア構造を用いた分析

この第3節では、基体名詞のクオリア構造と「名詞・er」全体のクオリア構造の関係を

ていく。基体となる名詞ごとに 3.1 から 3.3 に分けて論じる。3.4 では、3.1 から 3.3 のまとめと「動詞・er」との関連を論じる。ここでは、議論に関係のないクオリアについては、省略して表記する。

3.1 人工的な場所や施設を表す名詞

ここでは、人工的な場所や施設を表す名詞に接尾辞・er が付いたものの分析を行う。場所を表す名詞句とは、具体的に以下のようなものである。

- (9) prisoner, jailer, kindergartener, outfielder, Londoner, New Yorker, collegier, high schooler

施設を表す名詞の場合、その施設が持つ機能に関わる人間が「名詞・er」の意味として出てくる。

- | | |
|--------------------------|--|
| (10) a. outfield (x) | b. outfielder (z) |
| 形式役割: place(y) | 形式役割: human |
| 目的役割: z play in x | 目的役割: z play in x(=outfield) |
| (11) a. jail (x) | b. jailer (z) |
| 形式役割: place(y) | 形式役割: human |
| 目的役割: z force w in x | 目的役割: z force w in x |
| (12) a. prison (x) | b. prisoner (z) |
| 形式役割: place(y) | 形式役割: human |
| 目的役割: w force z in x | 主体役割: w force z in x |
| (13) a. kindergarten (x) | b. kindergartener (y, z) |
| 形式役割: place(w) | 形式役割: human |
| 目的役割: y take care of z | 目的役割: y take care of z in x(=kindergarten) |

(10)から(13)までのクオリア構造を見てみると、それぞれ基体となっている名詞の目的役割が「名詞・er」のクオリア構造に受け継がれ、その中の項構造の一部が「名詞・er」全体の意味として出てきていることがわかる。また、基体となっている名詞の形式役割が place から human へと変わっており、基体となっている名詞の目的役割が「名詞・er」のクオリア構造の目的役割、もしくは主体役割に受け継がれている。人間をクオリア構造で分析する際の目的役割と主体役割の違いについては、第 2 節で述べた通りである。ここでの例で言えば、prisoner は出所したり釈放されたりしてしまえば、もはや prisoner ではなくなる。したがって、prisoner は主体役割に、基体となっている名詞の目的役割が受け継がれてい

ると考えられる。また、**outfielder** や **kindergartener** は目的役割に記載されているような動作をしていなくてもよい。したがって、**outfielder** や **kindergartener** は目的役割に、基体となっている名詞の目的役割が受け継がれていると考えられる。

もう少し詳しく具体例を見ていこう。まず、**prisoner** と **jailer** について考えていこう。**prisoner** は「囚人」という意味であり、**jailer** は「看守」である。それでは、**jail** と **prison** はどのように違うのだろうか。英英辞典の定義を見てみよう。

- (14) a. **jail** : A place or building for the confinement of persons accused or convicted of a crime or offence; a prison. Now, a public building for the detention of persons committed by the process of law.
- b. **prison** : The condition of being kept in captivity or confinement; forcible deprivation of personal liberty; imprisonment; hence, a place in which such confinements is ensured; spec. such a place properly arranged and equipped for the reception of persons who by legal process are committed to it for safe custody while awaiting trial or for punishment; a jail
- (OED)

この定義に見られるように、**jail** は、「犯罪者を閉じ込めておくための施設」であることがわかる。一方で、**prison** は、「閉じ込められている状態」を示しているようである。このことを考慮に入れると、**jailer** と **prisoner** の意味の違いが説明できる。**jail** は、「犯罪者を閉じ込める」という機能（目的役割）を持つので、**jailer** は閉じ込める側の「看守」という意味を持つ。一方で、**prison** は「人が閉じ込められる」という機能（目的役割）を持つので、**prisoner** は「囚人」や「捕虜」といった閉じ込められる側を意味するようになったと考えられる。

次に、**kindergartener** について考えてみよう。**kindergartener** は、「保育士」「園児」の両方の意味を持つ。普通は、項構造の中の1つの項が「名詞・er」の意味として選ばれるが、この例では基体の名詞の目的役割にある項が2つ選ばれているように見える。これはなぜだろうか。まず、**kindergarten** そのもののクオリア構造から派生されたのは、「保育士」の方であると考えられる。目的役割の主語の項が「名詞・er」の意味になるのが一般的なパターンであるから、「保育士」の方が、よりこの現象に一般的な意味となるのである。一方で、「園児」の方は目的語の項に当たり、一般的なものから外れている。実はこの「園児」という意味は、教育機関に共通する目的役割から導き出された意味である可能性がある。詳しくは(19)から(21)で見ることになるが、**school** の一種である名詞に・er が付いた場

合、共通して「**z learn y in x**」という目的役割が出てくる。この目的役割を使って派生したのが、「園児」であると考えられる。

次に、町や都市といった人間が住むために作り上げた場所の例を見ていこう。これらの例では、「住む」という意味が共通して出てくる。

- | | |
|----------------------|-------------------|
| (15) a. London (x) | b. Londoner (z) |
| 形式役割: city(y) | 形式役割: human |
| 目的役割: z live in x | 目的役割: z live in x |
| (16) a. New York (x) | b. New Yorker (z) |
| 形式役割: city(y) | 形式役割: human |
| 目的役割: z live in x | 主体役割: z live in x |

(15)と(16)に挙げたような具体的な都市名に-erが付いた例は、比較的好く目にするものである。(15)の Londoner は、「ロンドン出身者」という意味にも解釈されるが、これは London のクオリア構造にはない情報で、Londoner のクオリア構造にのみ記載されている主体役割の情報であると考えられる。また、数は少ないが、単に町を意味する普通名詞や町の一部に接尾辞-erが付いた場合にも、「住む」という意味が出てくることがある。

- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| (17) a. town (x) | b. townner (z) |
| 形式役割: city(y) | 形式役割: human |
| 目的役割: z live in x | 主体役割: z live in x |
| (18) a. street (x) | b. streeter (z) |
| 構成役割: x is part of y(=city) | 形式役割: human |
| 目的役割: R | 主体役割: z live in x |

『ランダムハウス英和大辞典（第2版）』によれば、(17b)の townner は、「町や市の住民」を指す。streeter は、「ホームレス」と「街頭インタビュー」という意味を持つが、(18b)では前者の「ホームレス」の意味をクオリア構造で表示したものである。この(18)の例に関しては、street が「住む」ためのものであるとは考えづらいので、目的役割が派生に関係していないものと考えられる。

最後に、基体名詞が学校を意味する語の場合を見ておこう。

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| (19) a. high school (x) | b. high schooler (z) |
| 形式役割: school(w) | 形式役割: human |
| 目的役割: z learn y in x | 目的役割: z learn y in x |
| (20) a. college (x) | b. collegier (z) |
| 形式役割: school(y) | 形式役割: human |
| 目的役割: z learn y in x | 目的役割: z learn y in x |
| (21) a. school (x) | b. schooler (z) |
| 形式役割: school(y) | 形式役割: human |
| 目的役割: z learn y in x | 目的役割: z learn y in x |

school の一種であるような名詞に-er が付くと、共通して「～の学生」という意味がでてくる。これは、基体名詞の目的役割に記載されている共通の情報に注目して語形成が行われているためだと考えられる。すなわち、school の一種である名詞には共通して、「z learn y in x」という目的役割が記載されているということである。また、「学校-er」で表わされる「高校生」や「大学生」は、学校で勉強をしていないときでも、「高校生」や「大学生」でいられる。したがって、目的役割に基体名詞の情報が引き継がれることになる。

3.2 道具や人工物を表す名詞

本節では、道具や人工物を表す場合を見ていく。まず、具体例を確認しよう。

(22) fanner, bagger, clocker, pensioner, druggier, gardener, roofer, floorer

これらの例では、基体となっている名詞の目的役割や主体役割を使って派生が行われている。まず、道具を表すものについて見ていこう。

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| (23) a. fan (x) | b. fanner (y) |
| 形式役割: tool | 形式役割: human |
| 目的役割: y blow z | 主体役割: y blow z |
| (24) a. bag (x) | b. bagger (y) |
| 形式役割: tool | 形式役割: human |
| 目的役割: y put z into x | 主体役割: y put z into x |
| (25) a. clock (x) | b. clocker (y) |
| 形式役割: tool | 形式役割: human |
| 目的役割: y calculate z(=time) | 主体役割: y calculate z(=time) |

道具の使い方が、「名詞・er」の意味に出てきている。この使い方は、目的役割に記載される情報である。この情報が「名詞・er」の意味に受け継がれた結果、「扇であおぐ人」や「袋詰めをする人」という意味が解釈されと考えられる。

次に、基体の名詞が、人が作り出したものである例について見ていこう。

(26) a. pension (x)

形式役割: money

目的役割: y receive x

b. pensioner (y)

形式役割: human

目的役割: y receive x

(27) a. drug (x)

形式役割: physical object

目的役割: w drink x

主体役割: y prepare x

b. druggier (y)

形式役割: human

目的役割: y prepare x

(26)の例では、基体の名詞の機能である動作を使って派生が行われている。すなわち、基体の名詞の目的役割を使って派生が行われているということである。先ほどの道具名詞との違いは、基体の名詞が目的役割に記載されている動作の対象となっている点である。一方で、(27)では主体役割が「名詞・er」の意味に受け継がれている。しかし、(27)の druggier は、「薬剤師」という意味の他に、「薬物中毒者」という意味もある。こちらの意味については、基体の名詞の目的役割が受け継がれている例と考えられる。

基体の名詞の主体役割を使って派生されている他の例を見てみよう。

(28) a. roof (x)

形式役割: x part of w(=building)

主体役割: y make x

b. roofer (y)

形式役割: human

目的役割: y make x

(29) a. garden (x)

形式役割: x part of w(=house)

主体役割: y make x

b. gardener (y)

形式役割: human

目的役割: y make x

(30) a. floor (x)

形式役割: x part of w(=building)

主体役割: y make x

b. floorer (y)

形式役割: human

目的役割: y make x

家の一部分を意味する名詞に・er が付いた場合は、主体役割が出てきやすい傾向がある。家の一部分はその使用用途や機能がはっきりしないので、目的役割ではなく主体役割の方を利用したと考えられる。

3.3 自然物を表す名詞

最後に、自然物を表す名詞について見ていく。第2節で述べたように、自然物の目的役割と主体役割は無指定であることが多い。派生に使われるはずの目的役割や主体役割が指定されていないので、様々な意味が出てくることになる。まずは、具体例を確認しておこう。

(31) whaler, forester, laker, lander, islander, wester, easter, afternooner,

これらの名詞の多くは、**-er** 接辞付加に必要な目的役割や主体役割を欠いていると考えられる。そこで、何らかの形で派生に必要な目的役割や主体役割を補う必要がある。つまり、(31)に挙げたような自然物に**-er** が付いた例の多くは、クオリア構造だけでは解決できないものということになる。具体的には、社会常識で動詞的な要素を補って、その動詞的な要素を「名詞・er」の目的役割や主体役割に組み込むという操作を行う。具体的な例をいくつか見ていこう。

(32) forest

構成役割: tree ...

形式役割: place

(33) west

形式役割: direction

(32)の **forest** に**-er** を付けて **forester** となると、「森林の住民・動物」や「林業者」などの意味が出てくる。前者の意味では **forest** が場所として捉えられ、後者の意味では対象として捉えられている。(33)では、「西から吹く風」を意味し、**west** は方角として捉えられている。しかし、(32)に関して言えば、「住む」や「人が切り倒す」というような情報、(33)に関して言えば、「吹く」というような情報が、基体の語である **forest** や **west** に含まれているとは考えづらい。このような例は、社会常識などの言語外の要因が関わっていると考えた方がよいだろう。

3.4 ここまでのまとめと議論

この 3.4 では、ここまでの分析をまとめて、影山(1999)で議論されているクオリア構造を使った「動詞・er」の分析と比較していく。まず、ここまでのクオリア構造による記述をまとめる。次のⅠからⅢを見てみよう。

Ⅰ. 基体名詞の目的役割、または主体役割が、「名詞・er」のクオリア構造に受け継がれる。

- II. 「名詞・er」の表す意味は、クオリア構造内の目的役割、または主体役割の主語位置の項であることが多い。
- III. 目的役割と主体役割が無指定である場合は、クオリア構造以外の要因によって決定される。

これらの分析結果を踏まえて、「動詞・er」の分析との比較に移ろう。影山(1999)では、「動詞・er」についてクオリア構造を用いた分析を行っており、基体動詞の語彙概念構造が「動詞・er」の目的役割や主体役割に組み込まれていると分析している。今回の「名詞・er」の分析においても、基体名詞の目的役割や主体役割が、「名詞・er」の目的役割や目的役割に組み込まれていた。基体語の動詞の意味情報が er 名詞の目的役割や主体役割に受け継がれるという点では、共通している。ただし、「名詞・er」の場合には、名詞の意味情報の一部である動詞的な部分が取りだされて組み込まれる。これは、「動詞・er」が基体動詞の意味情報全体が組み込まれることを考えると、異なる点といえるだろう。しかし、これは些細な違いである。上で述べたように、「動詞・er」と「名詞・er」は、クオリア構造を通して見てみると、かなり類似するところがある。最後に、「動詞・er」と「名詞・er」の共通点と相違点をまとめておこう。

共通点

- ・ 基体語の動詞の意味情報が、er 名詞の目的役割、または主体役割に受け継がれる。
- ・ 動詞の意味情報の中の外項が出てきやすい。

相違点

基体語が動詞の場合には、基体動詞の意味情報全体が受け継がれる。一方で、基体語が名詞の場合には、基体名詞の意味情報のうち、動詞的な部分のみが取りだされて受け継がれる。

4. まとめ

本稿では、名詞に接尾辞・er が付いた語の意味について、クオリア構造を使った分析を行った。その結果、基体名詞のクオリア構造の目的役割や主体役割の項構造を使って意味の派生を行っている可能性を指摘した。しかし一方で、自然物などの扱いが難しい例もあり、今後課題の残る結果となった。本研究の今後の展望として、本論文では扱わなかった **Lexical Inheritance Structure** を使った分析がある。本論文では、予測性という点をあまり重視せずに論じてきたが、**Lexical Inheritance Structure** を使った分析では、強い予測性を出すことが期待できる。本論文の研究を踏まえ、より良い仮説の構築を目指したい。

＊本稿は、平成 23 年度学習院英文学会（平成 23 年度 10 月 15 日）における口頭発表の内容に加筆修正を施したものである。発表や本稿執筆に際し、中島平三先生、高見健一先生をはじめ、多くの方々から貴重な指摘や助言をいただいた。また、査読者の方にも有益なご意見をいただいた。ここに記して感謝したい。

参考文献

- Busa, F. (1997) “The Semantics of Agentive Nominals in the Generative Lexicon.” In Patrick Saint-Dizier ed. *Predicative Forms in Natural Language*. Amsterdam: Kluwer.
- 影山太郎（1999）『形態論と意味』東京：くろしお出版。
- 小野尚之（2005）『生成語彙意味論』東京：くろしお出版
- 小野尚之（2008）「チュートリアル クオリア構造入門」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No.4』265-290. 東京：ひつじ書房
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*, Cambridge, MA: MIT Press.